親から子へ、子から孫へ　伝えようわがまち、よいところ

萩原再発見

近代～現代編
Vol.007

築込［つきこみ または つきごみ］地区

発行：萩原町連区地域づくり協議会

（取材・調査・編集制作：萩原町郷土史研究会 ©）

ふるさと自慢 Vol. 007「築込で楽しめる桜・螢名所」

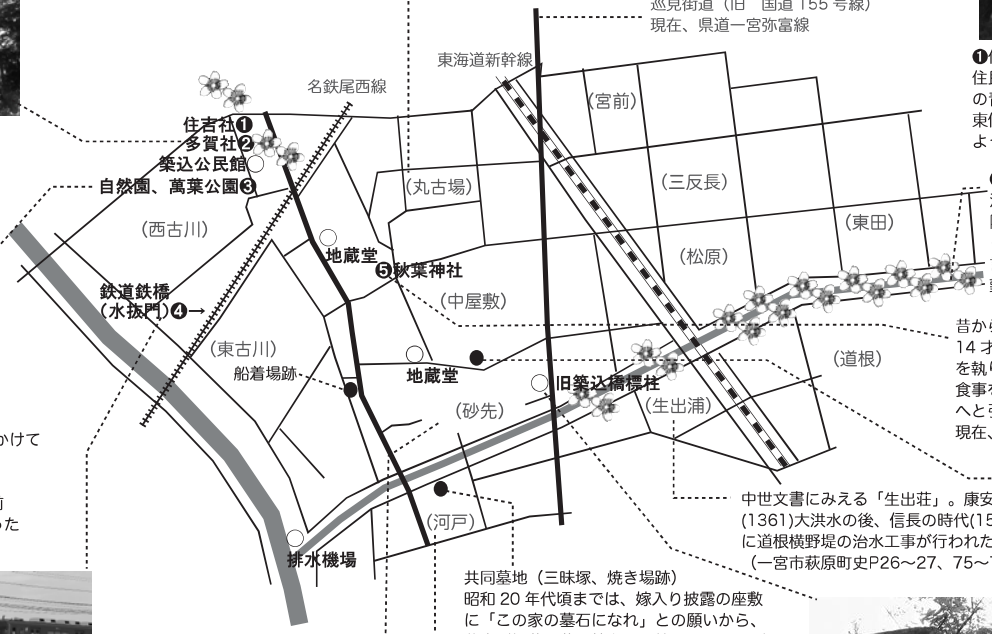
毎年4月上旬頃になると、国道155号線から西側の新堀川沿道は桜で華やかに彩られる。散策しながら、西に1kmほど進んだところで北に向かうと萬葉公園築込地内に至る。約百本近くある染井吉野・河津桜などの桜が見事に咲き誇る公園周辺は、近郷近在の人々の花見スポットとして愛されている。築込町内では昭和54年に「桜守会」を結成、近年は花見期間中に提灯をさげて花見を盛り上げている。（下段解説参照）　また、自然園の夏ホタル鑑賞会も好評である。

多賀社（左側）と住吉社のクスノキ。
「川に流れていた木札を祀った」多賀社の伝承が残っている。
（萩原町史 P600）

昭和 19 年 12 月 7 日　三重県沖を震源地とする東南海地震（M7.9）で、多くの家が倒壊、丸古場で 1 名が圧死した。
「稲刈りの最中に、田んぼの黒土のうえに、液状化した砂がもくもくと吹き出てきた。」

❶住吉社参道の桜トンネルは、昭和 15 年頃住民の篤志によって苗木が寄贈され、当時の青年団により植樹された。
東側の広場の桜は萬葉公園開園後、市によって植栽された。

毎年 6 月上旬から 7 月上旬にかけて自然園ではホタルが飛び交い、訪れる人々の心を癒している。
萬葉公園築込地内の門柱は戦前から萩原町役場（串作）にあったもの。



❼新堀川（光堂川からの支流）
江戸時代には光堂川筋新割掘と呼び享保年間隣接7か村から開発人夫が駆り出された。
（一宮市萩原町史P179,180）
言い伝えでは、「築込側は人夫を出さず、監督を勤めた」といわれている。

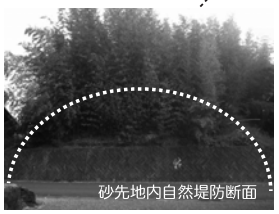
昔から小学生の集団登校集合場所。戦前には、14 才までの子どもが主体となって 12 月の祭りを執り行なっていた。宿に泊まり、自分たちで食事を作り、火の始末の大切さを先輩から後輩へと引き継いで伝えるよい機会でもあった。
現在、子ども会活動で、その名残が続いている。

中世文書にみえる「生出荘」。康安年間(1361)大洪水の後、信長の時代(1575)に道根横野堤の治水工事が行われた。
（一宮市萩原町史P26～27、75～76）

共同墓地（三昧塚、焼き場跡）
昭和 20 年代頃までは、嫁入り披露の座敷に「この家の墓石になれ」との願いから、若衆が地蔵と墓の棺台石を持ち込む風習があった。
（一宮市萩原町史 P552～553）

河戸、砂先、生出浦といった水辺に関する字名から江戸時代には、奥地まで湾が入り込んでいたと考えられている。
（裏面古地図参照）

鉄道堤で暴雨の水が田に貯まらないように作られた水抜門。
昭和34年の伊勢湾台風や、昭和36年の集中豪雨による被害の軽減に役立ちました。



太線で示した道路の東側一帯は、旧萩原川（現日光川）の境界線（自然堤防）といわれており、今も高台の地形が南北に続いて残っている。

❻加藤金平氏顕彰碑
明治時代、村民子女の教育に尽力された加藤氏顕彰碑。
（一宮市萩原町史P724～725）

N

築込の海抜　3.8m

築込地区　基本データ　平成25年9月現在

■世帯数　115戸（推定人口　約410名）
※世帯数は町内会加入戸数とした。江戸寛文12年　1670年頃は19戸,98名と馬5疋。
※現在、築込住民の60才以上は150名、高齢化率36.6%を占めている。

■小字数　13
（丸古場、野中、中屋敷、生出浦、宮前、三反長、松原、東田、砂先、河戸、道根、東古川、西古川）
※町内会は、8つの隣保班に分かれ、協同で町内を自治管理している。
別途、4つの瀬古（講組織）が存在する。
（中ノ切28日講、南ノ切28日講・22日講、北ノ切講）

■沿　革
明治22年10月1日　串作、滝、高松、戸苅、朝宮と共に萩原村に合併

■近代（戦前）から現代（平成24年）の主な出来事
【昭和10年～20年代】
戦時中、築込からも兵役出征や、満州農業開拓団に住民が派遣され、22名が帰らぬ人となった。当時、物資を管理配給する軍需工場があったが、村への空襲はなかった。
【昭和32年】
萬葉公園が完成。
【昭和37年】
萬葉公園顕彰会が正式に発足。
【昭和39年】
東海道新幹線が開通。それを記念して、秋祭の獅子頭を新調した。
【昭和50年】
新堀川護岸工事が完了。洪水防除の排水機場が完成した。
【平成17年】
築込公民館を新築。
（旧河道地盤の為に起こる液状化に耐える構造の対策がとられている。）
【平成18年】
築込自然園が完成。
萬葉公園ホタルの会が発足した。

■築込の歴史文化ランドマーク（目印）
❶住吉社
❷多賀社
○築込公民館
❸自然園、萬葉公園築込地内
❹鉄道鉄橋（水抜門）
❺秋葉神社
○地蔵堂
❻加藤満主(金平)氏顕彰碑
❼新堀川
○新堀川排水機場

（萩原町郷土史研究会調査　参考文献：一宮市萩原町史 寛文覚書P697、他）

萩原宮町
萩原本町
萩原中町
萩原中区
萩原下町
二　子
朝　宮
串　作
荒　南
滝
高　松
戸　苅
築　込
西御堂東
西御堂西
中島道場
中島麻塚
中島南方
中島北方
東宮重
高　木
西宮重
河田方
林　野
冨田方
花井方
塚　原
県営第一御堂
県営第二御堂
県営第三御堂
レインボー2

写真と想い出でつづる戦前～昭和時代

■言い伝えや、歴史・伝承の文化について

（江戸幕末～明治生まれ世代から代々伝わっているお話、祭祀儀礼の慣習行事、伝統の住民活動など）

住吉社屋根下のお鍬飾り

明治3年におきた稲葉騒動の時には、丸古場にあった庄屋が焼討ちにあいました。また、木曽川水系（日光川、宮田用水など）の恵まれた水環境と豊富な米の収穫を背景に、造酒屋（中屋敷）があり、昭和30年代まではお酒をつくる大きな樽の木桶がありました。

村には「三昧に石塔のお墓を建ててはならぬ。」という掟があり、土葬の塚の上に塔婆（とうば）が立てられていました。大正14、15年頃から、各自宅の庭先などに石塔を見かけるようになりました。昭和40年に現在の共同墓地が整理され、丸く盛った塚の姿は見られなくなりました。

新堀川は、江戸時代より、上流の高井、東宮重から高木に流れる光堂川の「悪水落とし」として、築込に引き込まれ、日光川に流された新川ですが、光堂川から大和地区につながる大縄川を通じ、船を使って南高井までお米を運んだ生活河道の役割もありました。

オビシャ（御歩射）や左義長（三毬杖）の習俗は今も細々と続けられています。また、平成21年には60年に一度のお鍬祭りがあり、鍬飾りが120年振りに新調されました。

■戦前～戦時中の子どもの頃　（人々の様子や村の風景）

村は、地主とその縁者・自作農・小作農の三つのグループ集団に分かれて集落を形成していましたが、各集団同士の争いは少なく、互いに理解し、協力し合う結束力の強い絆で結ばれていました。太平洋戦争が始まるころになると、多くの家庭から働き手が兵役にかり出されたり、満州農業開拓団に派遣されたりする者があり、さらに食料難で家族の口減らしの為に子どもがお寺へ奉公に出されたりと、家族が別れ別れになる厳しい現実がありました。戦時中は、米どころかヒエやアワ等まで、ありとあらゆるものが、統制配給されていました。

また、村中どこも泥道で雨が降ればぬかるみや水たまりができて大きな農産物の配送はひと苦労でした。村全体の活動にもかかわる経済性や、利便性を考慮して、道路に河原の砂利を敷いて大八車などの轍（わだち）を無くしましたが、当時の住民の多くは、はだしで農地へ出かけていたので、「かえって足が痛くて困る。」との苦情も多く寄せられました。昭和の20年代頃までは、普段、草履や「ぶくり」と呼ばれる歯の薄い下駄を履いていた時代でした。

■戦後から復興期、高度成長期あたり　（苦労話や暮らしの知恵・工夫話）

村道に残る芯杭跡

市道にならなかった村道には、今も消炭入りの竹筒（深さ50cm位）の芯杭が地中に残っています。どんなにぬかるんでも表面を削れば中心線が確定でき、左右の距離を測量して道幅を一定に保つことができました。

東海道新幹線の村内敷設の是非をめぐり昭和29年から34年頃に亘って、村で反対運動が巻き起こり、三尺六尺（90×180cm）のむしろに建設反対と墨書した竹竿が旧155号線沿いに立ち並びました。また、その後昭和40年頃には、築込に駅が出来るとの噂がたったこともありました。

昭和35年から始まった土地（農地）改良では、所有権問題で様々な苦難がありました。仮決め農地では落ち着いて農作業もできず、会社勤めに転職したり、新たな仕事として、機織り業や養鶏業、金魚養殖業などを始める人もいました。上流にある田の落ち水を流す役割の排水機場が完成（昭和50年）したのちも、砂地で水はけの良すぎる田が多い築込では新堀川の立切りをそのまま残し、田の水の地下浸透を抑えるなどの目的で水位の調整を行い、役立てています。

西古川地内にて撮影

伊勢湾台風後も根腐れしなかった桑の大木（推定樹齢 100 年以上 ）

調査・撮影・監修協力：加藤正典、柴田一夫、加藤隆康（築込）
執筆：柴田一夫（築込）、金子光二（萩原町郷土史研究会）
イラスト：一宮市萩原中学校美術部 OG、他　　2013.09.01

萩原 いま、むかし

Hagiwara Photo アーカイブ

いにしえから水とは長くて、深い仲。

昭和 34 年　田園一面が浸水（東古川地内）

平成 25 年現在　　船着場跡南側より撮影

昭和 34 年　氾濫した新堀川（河戸地内）

平成 25 年現在　左側に排水機場施設

【解説】昭和 34 年の伊勢湾台風では日光川が氾濫（写真左上）、新堀川の護岸からも水が溢れ出して（写真左下）床下浸水した所が多くありました。砂先地内では、地名が示す通り川砂が庭先までたくさん流れ、自然堤防沿いに茂った竹やぶも倒れて、道をふさぐほどの災害でした。

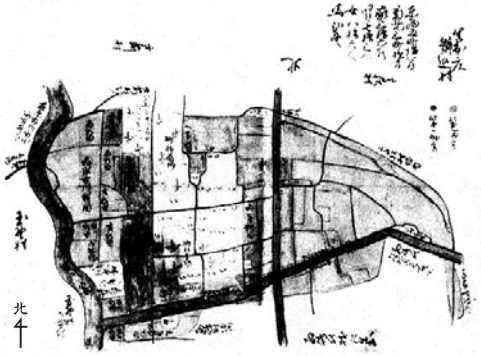
新堀川の底面がまだ砂地だった戦前には、どうびんやしじみがたくさんとれ、澄んだ水辺にはあゆなども生息していました。

また、昭和 20 年代中頃までは、夏になると新堀川で水浴びする人も多く、「子どもの頃、立切りの欄干を飛び込み台にしてよく泳いだものです。」との想い出を語る古老もいます。

築込の歴史考

（掲載図：愛知県図書館所蔵 古地図／村絵図 (中島郡村邑全図) 222 中島郡村邑全図築込村全体図一製作年 江戸寛政頃）

江戸時代の地図を見ると、築込村が蛇行した日光川に突き出したようになっており、川の中に「築込（ツキコ）んだ村」であったところから「元禄郷帳では築込（ツキゴメ）」となり、現在の築込（ツキゴミ）というような名がついたと想像されます。「砂先」「東古川」「西古川」「河戸」等川にまつわる小字名が現存するのもその名残といえます。江戸時代のはじめ（寛政年間）頃までは萩原川（現在の日光川）の川幅が広く、陸路の美濃路と同様に河川でも、名古屋・常滑や四日市の港まで荷物の運搬が盛んに行われ、村には戸数 36 軒中 10 軒の船頭がいたといわれています。築込住吉大明神社（現在の住吉社）を村社として祀っているのは（八幡が陸神であるのに対して）住吉が海神であり、船頭の信仰を集めていたためのようです。近年は繊維工業が盛んになり、昭和 30 年代から 40 年代初頭は、農家が兼業として繊維関連の工場を経営するものが増えその数は、20 軒に及びました。高度成長期には、「ガチャマン時代」を謳歌しましたが後に不況の波に襲われて廃業者が続出し、今では稼働している工場は、わずか一軒となりました。



今も変わらない道筋がのこっています。

50 数年前に萬葉公園が開園し、今では、春は花見を中心とした市民の憩いの場となり、夏は豊かな自然の中夜空をホタルが飛び交い、人々の心を癒すやさしい触れ合いのまちへと変わりつつあります。

また、モズ、キジ、ウグイス、鵜、鴨、鷺などが飛来する自然豊かな地区でもあります。